

# びぶりおてか



同志社大学図書館報 No.48 1991. 1. 7

## 学術情報センター発足にあたって

—学内における情報の集積基地として—

図書館長 島 弘

今日、大学においては、国際化とともに情報が教育・研究に大きな影響を与えている。もともと大学というのは研究と教育さらには社会

への貢献というどれをとっても、情報という手段でその機能を果たしていたものである。情報を抜きにして大学はその歴史的な役割を果たす事は出来なかったであろう。しかも、このような情報を多年にわたって蓄積し、社会に伝え、後世に伝承していく事を中心の仕事として行ってきたのは、図書館である。古来おそらく大学図書館は大学の成立・発展と共に存在してきたといってよいであろう。その意味においては、図書館を抜きにして大学を語る事は出来ないであろう。

しかし、最近における情報処理機器の発達を基礎にして、さらに情報伝達機器の発達によって、大学へもたらされる情報の量は、数千倍に増加したと言えるであろう。また、現在の科学や技術の発達は、自然科学・技術のみならず、社会科学・人文科学において、その進歩とそれを進歩させている場所の飛躍的な増加をもたらした。現在のすべての科学は、膨大な情報を集

### 目 次

学術情報センター発足にあたって……	1
大学図書館から学術情報センターへ……	3
これからの目録作成……	5
ラーネッド記念図書館 レファレンスカウンターニュース……	6
文献探索 新聞・新聞学に関する二次文献……	7
実例を中心とした 資料のさがし方(37)……	8
学内すべての端末機で図書の検索が出来ます……	10
びぶりおてか総目次No.1～No.48……	付録

中し、それを適切に処理をした上での研究・教育の発展以外に考えられない時代へと突入した。現在では、このような情報機器・情報伝達機器を基礎に置かない研究や教育が考えられない位にその役割が増加している。

このような状況の中で、図書館の役割の変貌とその役割の増加を考える必要があるであろう。先に述べたように大学というのは、社会における情報の蓄積基地であったし、図書館はその中での情報の蓄積の中心基地であった。これらが情報の役割の増加とともに変化しないわけにはいかないのは当然であろう。最近の約10年程の間の図書館の変貌には目を見張るものがある。まず図書を検索するカードが徐々に無くなってきた。図書検索がコンピュータで行われる事になったからである。これにともない文献目録の作成がコンピュータで行われるようになった。さらにいろいろな情報機器が図書館に導入される事になった。さらにこれらの大学図書館が発達した情報伝達手段によってつながれるようになった。いわゆる「学術情報システム」である。

さらに研究面だけではなく、教育の側面でもこれらの情報機器は大きく教育を変貌させていったのである。今日、教室における授業にビデオやOHPを用いる事は日常の事となった。同志社大学でもこれらの機器が使用できる教室が急速に整備されつつあることはご存知の所であろう。また、コンピュータそのものの教育も急速に整備されつつある。すなわち、これからの高度情報社会を築いていくためにも、新たな情報技術を開拓する人材とともに、情報技術の進展にともなって、それをいろいろな分野に活用する能力を持つ人材を養成する事は時代の要請である。これらの人材の養成のためには、教育面での整備が重要であるとともに、それを援助する体制も重要である。教育用の情報機器の整備とその有効な使用体制の完備は今後の教育の重要な手段とならざるを得ないであろう。

さらに、それだけではない。高度情報社会の発展とともに、職業生活や家庭生活において、情報や情報手段に関する新たな知識による再教育が要請されてくるであろう。これらの社会教育もこれからの大学にとっては重要な仕事にな

るだろう。これらの教育の方法は、今後発達をしていく情報機器を利用しながら効果的に進める事も大学の社会的使命となるであろう。

このような多様な社会的使命を大学が果たして行くためには、今までの情報基地としての図書館に蓄積されてきた情報の処理並びに検索・利用における知識や技能を十分に活用しながら、最新の情報機器の利用によって、新しい情報手段を導入する環境整備を行わなくてはならない。それを十分に活用するためには、学内外におけるネットワーク化が必要になるし、現在は最も重要なデータベースである図書の検索システムをますます発展させ、学内におけるすべての図書・逐次刊行物のデータベース化を促進するとともに、それ以外の研究上・教育上必要となるすべてのデータベースを完備しなければならない。それは必ずしも、学内だけ固執する事は必要ないであろう。学外の貴重な資料や研究成果その他のデータベースもネットワーク化が前進している現在、学内における利用体制の整備を前進させる事によってかなりの利用が可能になるであろう。

そのためには、学内における情報ネットワークとその処理機構を充分体系的に整備する事は現在の大学にとって緊急の課題であると言う事が出来るであろう。1991年4月に発足する「同志社大学学術情報センター」はこのような遠大な課題を実現するための環境整備であり、大学の将来的な展望の中で重要な役割を担う事を期待されている。その仕事を十分に完成するためには、今までに図書館に蓄積されてきた貴重な知識と技能を再点検し、その長所をどのようにして新しい高度情報社会に発展的に適用するかを模索する事は、図書館にとっての課題であるし、さらにその上に立って、高度の情報化を十分に完成する事は欠かす事のできないことである。しかし、歴史の長い期間の間に、図書館が発展してきた道程を省みれば、この任務は、十分に担えるだけの能力と知識を図書館は備えているものと確信している。新しい情報の基地としての発足に際して、長い図書館の歴史に敬意を表しながら、新しい役割への希望に胸を膨らししながら、この機関誌の最終号を発刊したい。



# 大学図書館から学術情報センターへ

本年4月1日から、大学の歴史とともに歩いてきた図書館が、計算機センターおよび教務部に属していた視聴覚室と合体し、メディア・ライブラリー機能と情報処理機能を統合した学術情報センター（以後情報センター）として発足することになった。歴代の図書館員が、その活動の軌跡を愛着をもって記してきた図書館報も、本号で終刊とすることになり、長年この図書館に親しんでこられた利用者や館員の中には、さまざまな思いが去来するものと察せられる。その感慨も含めて、これからの学術情報サービスへの展望にふれ、新しい組織への橋渡しとしたい。

## \*\*\*\*\* 情報化時代 \*\*\*\*\*

「情報化時代」の幕開けがいつからであったかについては、定かではない。すでに十数年前からテレビがマスコミュニケーションの主流の座を占め、出版物の洪水が始まっていた。大学においては、図書や雑誌の情報量が飛躍的に増大してきた時代といえる。まだ、テレビのニュースなどは、新聞や雑誌でもほぼ捕捉され、大学の学術情報の対象としては一般的には意識されなかったが、経済や政治、そして技術革新が展開するサイクルがはやまるにつれて、情報提供サービスにとって、「時間」が重要なキーワードとなりつつあった。その後、情報処理技術の革新による金融、流通、出版等の質的な転換や、いわゆる情報産業等の出現が「情報化時代」の概念を定着させたものといえる。それ以上に強く意識させられたのは、通信衛星によって各国のニュースの国境がとりはられ、世界の現状が、新聞ニュースよりも早く茶の間にとどけられる事態に気づいたときからである。

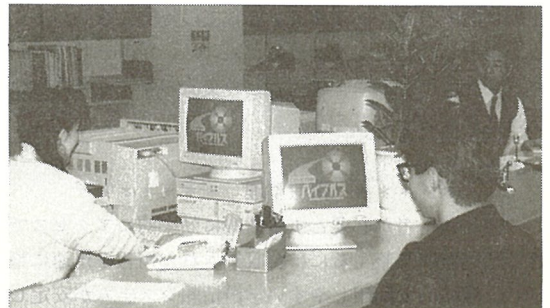
多様な形態で増大する情報の中から、必要な情報をできるだけ早く利用者に提供する。これがこれからの情報サービスの課題であろう。もちろん、図書資料の蓄積と提供サービスが、大学図書館の重要な使命であることには変わらないが、このような時代環境を背景に、研究教育における国際化、学際化、情報化に対応できる学術情報には「多様性」「新鮮さ」が求められるようになり、情報サービスの方法やその組織機能についても、教学体制の充実という視点から、根本的な検討がせまられてきたのである。その結果、この情報センターは、関連する組織の枠をとりはらうことによって、いままで蓄積されてきた知識や技術を結集し、新しい時代への教学体制の支援機能を形成するために構想されたものである。

## \*\*\*\*\* デジタル資料 \*\*\*\*\*

昨秋、田辺校地学生課と外国文学研究会共催のアクセシブルアワーで、ドイツ・ジューゲン大学のヘルムート・シャンツェ教授の講演をたまたま聞いた。「文化情報学」という演題であった。内容は、これからの文学研究においては、文学作品などをそっくりコンピュータ可読データ（フルテキスト）に変換し、コンピュータを駆使した研究が幅広い分野で普及すること、そして、デジタル化された作品をディスプレイで読んだり処理することへの抵抗感を克服することの必要性を説かれていたのが印象に残った。

すでに、二次文献、辞書、辞典類以外に、まだ実験の域をこえてはいないが、シェークスピアの全作品やコナンドイルの作品、あるいは聖書、社会科学関係では判例抄録や有価証券報告書、各種企業財務情報などがCD-ROMで入手できる。今後は、各国の統計情報がデジタル資料として入手することが可能になる。

このように、いままでは情報処理の枠組みの中でデータとして扱われていた情報を、一般的な学術資料と同じように扱おうというのである。これを共同利用のコンピュータ可読学術情報として収集し、総合的なサービスができる機能を整備することも今回の組織統合の大きな目的のひとつである。もし私達が相応の技術を修得できれば、研究者と協力して、本学独自の主題をもったデータベースの構築をも展望していかねばなるまい。指摘されるように、学術情報センターは、情報の受信基地に甘んじるのではなく、国際化時代における情報の発信基地としての機能もあわせもつ必要があるからである。



## \*\*\*\*\* 視聴覚資料 \*\*\*\*\*

次にこれからの学術情報として重要なのは、視聴覚資料である。とくに最近のテレビを中心とした映像情報は、ある意味で社会体制そのものにも大きな影響を及ぼしているときえ言われている。とくに衛星放送が開始されて

以後、社会、文化、経済、政治状況等の国境を超えた映像情報は、世界各国のニュースのみならず、ドキュメント、インタビュー、討論、会議など、いわば活字で記録される以前の生情報ともいべきものであり、学術資料の対象としても語学資料としても無視できないものが少なからず含まれている。これらの映像情報を短期、中期、永久といった段階的フィルターにかけつつ、系統的に学術資料として保存し、研究、教育上に活用できるようにしなければならない。

新しく発足する情報センターでは、このように多様化する学術情報を総合的に収集していくために、田辺校地図書課を廃して、新たに収書係（図書、雑誌収集担当）、学術情報係（デジタル資料、視聴覚資料担当）、田辺校地閲覧係（田辺閲覧サービス）の3係からなる学術情報課を設置し、そこに教務部に属していた視聴覚室を統合することになった。

#### \*\*\*\*\* 情報サービス \*\*\*\*\*

今後、中学、高校、大学の各段階での情報処理教育が普及し、コンピュータを、情報を扱うための身近な道具として気軽に活用できる世代が入学してくる。これからの利用者は、多分、それぞれのテーマに関連した図書、雑誌論文、ビデオ資料、デジタル資料（データベースやCD-ROM）など多角的な利用サービスを求めてくるだろう。このような利用者のニーズに応じていくために、現閲覧課は情報サービス課となり、すでに光ディスクファイルや新聞データベースサービスの準備を進めている。

これからの情報収集担当者やレファレンスサービス担当者にとっては、このような複合的な情報サービスが行えるだけの技術的対応力とあわせて、学問研究の学際化傾向に即して各種情報を収集し提供していくためにも、主題に関するライブラリアンとしての専門性を高めることが重要な課題となる。そのためには、組織としての研修システムの整備や、研究者との交流の場を従来以上に広げていく必要があろう。

#### \*\*\*\*\* 情報整理 \*\*\*\*\*

一方、利用者が必要とする情報に効率的にアクセスできる利用環境を整えるには、収集された情報を迅速に整理し、機能的で利用しやすい学術情報システムが安定して作動していなければならない。本学においても、1982年から、書誌情報をコンピュータ可読ファイルとして蓄積を始めた。これは当時の時点で現在の状況を予測した英断といえよう。すでに、図書の整理は、＜国立学術情報センター＞のShared Cataloging System による目

録作成をおこなっており、相当整理時間を短縮することができるようになったが、これからの学術情報システムは、いままでのような図書館内システムというのではなく、学外の情報システムとリンクしつつ、田辺、今出川校地を一体の教学空間として、情報センター、各学部、研究所等の研究施設、実習端末室等を有機的に結びつける学術情報基盤として整備されることになる。

#### \*\*\*\*\* 情報サービスとシステム支援 \*\*\*\*\*

新しい情報処理技術を適宜組み入れながら、情報システムの構築や改良をし、それを運用していくためには、その基盤となる大型計算機の運用や各種ネットワークとの整合性が必要となり、情報サービスの担当者とシステムの担当者との緊密な連携が求められてくる。情報サービスを担当するスタッフは、システムを活用する立場から、ハードやソフトの機能を理解する必要があるし、システムを担当するスタッフにとっては、学術情報サービスとは何かという支援対象についての知識が不可欠のものとなる。この両者の相互領域におけるチームワークがうまくいくことによって、利用者にやさしい情報環境が担保できるのである。

今回の組織統合にともない、計算機センター事務室が情報システム課となることによって、情報センター内部の情報システムに関する相互領域の枠が広げられることになった。したがって、同じ組織内で共有できる知識や技術を深めつつ、全体としての専門的な処理能力を高め、同志社大学にふさわしい学術情報基盤の開発や教育支援サービスを充実させていきたいものである。

#### \*\*\*\*\* 開かれた＜図書館＞として \*\*\*\*\*

図書館から情報センターへと組織が変更されても、大学の学術情報に占める書物の重要性がかわることはないであろう。紙に印された情報、つまり文字を凝視して、人間が知識を磨きあげてきた歴史的感性ともいべきものは、むしろ大学においては、今後も守り続けなければならない。その意味からも、情報センターは、いわゆるペーパーレス・ライブラリーを志向するものではなく、多様な情報の活用と新しい技術の応用について、開かれたセンターとして位置付けられよう。今後は、学術情報センター委員会において、全学的な視野から、基本的な方針が審議され、それにもとづいて共同利用のサービスセンターとして運営されることになるが、私達には、他に参考とする確とした航路図もない。したがって、研究者や学生諸君からのご支援とご批判を指針としながら、総合的な学術情報のセンターとして発展することを願っている。



# これからの目録作成

—正確に、多くのデータを、早く提供するために—

学術研究の発展に寄与するため、1986年東京の元教育大の跡に「学術情報センター」が文部省によって設立された。内外のあらゆる学術情報を検索するためばかりでなく、国内の学術情報の構築をも念頭に置いた画期的な情報センターの設立である。このセンターを中心に全国の国公私立大学（現在約140大学）にネットワークが敷かれてある。本学も昨年（1990年）4月にこのネットワークに参加した。

様々な分野の論文の二次情報や図書・逐次刊行物の目録情報がデータベース化されて、参加館が自由に検索でき、利用者の要望に対して迅速に対応できるようになっている。情報資源の共有化と相互協力によって、多くの図書館があたかも一つの巨大図書館の如く機能するように計画されている。図書館の長い歴史の中で、これほど大きな理論的機能の変革はかつてなかったであろう。

どの図書館も整理のスピードアップが叫ばれて久しいが、このシステムに参加する事によって、2～3年で相当なメリットが出てこよう。どの大学も購入する大半の図書は同じ図書なのに、人手を多く費やし、何故別々に目録を取るのだろうかという疑問は何十年も前から言われて来た。この当り前の事がコンピュータの技術進歩によって、日本でも初めて可能になった。

さて、以上のように我が国の図書館サービスにとって革命的な計画が実現されたが、まだスタートしたばかりで、これからをどうするか、大変地道な努力を積み重ねて行かねばならない。ここ10年前から図書館の機械化という業務再編が大きくクローズアップされ、本学でも一応検索システムが出来、学術情報システム参加にようやくこぎ着けたが、本学のローカル側のシステムはまだ改善の余地があり、本格的なトータルシステムの取り組みはこれからである。しかし、学術情報システム参加が成功するか否かは、より良いローカルシステムをどう作成するか、そして出来たシステムを利用して如何に利用者には効率良く、質の高いサービスを日常的に行うかにかかっていると見てよい。

箱（システム）が大きく立派でも、中に入っている物（データ）の質が良く量が多くなければ、利用者サービスにとって十分な体制になっているとはいえない。箱が出来ると中身もいっぱい詰まっているものと錯覚しがちであるが、本学ではまだまだ所蔵している資料の内、2割弱のデータしか入っていない。現在は通常の購入資料を如何に早く整理するかに主要な努力をしているが、早く未整理図書をなくして、過去の資料の遡及入力にも大きな努力を費やさねばならない。この遡及入力は国内ばかりでなく、海外でも大きな風潮になっているし、またそれが可能な時代になったと言える。例えば国立国会図書館ではここ10年以内には明治期以降の和図書を全部遡及入力してしまうという計画を既に実施しているし、またアメリカでも同様な計画を実施しているので、自分で一からすべて目録を取らなくとも、データの入力は一段と容易になりつつある。ちなみに幾つかの大学ではすべての図書をオンラインで検索できるようにと数億の費用をかけて過去の図書を全部データベース化する事を手掛け始めた。本学でも遡及入力は一大事業として位置づける必要があるだろう。

さて、しかしデータの質と量をどう高め、如何に早く実現したら良いのだろうか。双方を高めるのが理想であるが、人力と費用に限界がある以上、相反する要素が生じるので、頭が痛い問題である。質を高めれば、思うように量が増えないし、量を増やせば、質が落ちる。杞憂かも知れないが、最近目録やデータの中身の問題を話題にすることが少なくなったということである。これはおそらく各大学が初めて目録をとる割合が減ったためと思われる。ヒットしてローカル情報を入力したら、目録作業は終了という常識が出来たら大変である。かつてアメリカでOCLCのネットワークが急成長を遂げた後、データの大きな見直しを行った経緯があるが、学情システムもそんな事にならないだろうか心配でもある。

では目録の質を良くして、量を増やすにはどうすべきか。標準と言われる目録規則にはたくさんの記述要素がある。しかし全てを正確に記述する事は不可能である。目録は利用者と資料とを結び付けるものでしかない。検索に必要なキーはアクセスポイントと言われるものであるが、その部分を中心に正確に記述さえすれば良いのではなかろうか。アクセスポイントを重視した正確かつ早期作成の目録を目指すべきと考えたい。

とはいえ、初めて目録をとる時、標準的な目録の諸規則の理解が必要であるし、語学の理解をも深めなくてはならないし、資料に対する精通力も付けなくてはならない。既成の機械可読目録や様々なデータベースは大いに利用すべきであるが、それらの中身がどのような構造で、どのような内容であるのかといった知識の修得にも力が注がねばならない。

いづれにせよ、利用者にたいしてより良いサービスをするための目録とは、当たり前の事であるが、質・量・スピードの三点セットで考えなくてはならないものである。これを踏まえて一層の努力をすれば、自ずと利用者にとって有効な目録となるであろう。

## レファレンスカウンターニュース

学年末の試験期に入り学生の皆さんは勉学に一層力が入っている今日この頃ではないでしょうか？

ラーネッド記念図書館では、1990年度一般教育科目履修要項に掲載されている参考文献資料の図書館所蔵リストを準備しています。

紙面の関係上、ここには一部ご紹介しますが、その他の科目については直接カウンターにお問い合わせ下さい。

- ◎ 宗教学 ⑩～⑬⑮ 森田雄三郎
  - ☆ キリスト教を学ぶ人のために (武藤・平岩編 世界思想社) ㊦ 190:キ ㊧ 194.01:K15
  - ☆ ユダヤ思想(荒井・森田著 大阪書籍) ㊦ 199:ユ ㊧ 168:A4
- ◎ 哲学 ③ 立山善康
  - ☆ 人間の研究(マイケル・ボラニー著 沢田他訳 晃洋書房) ㊦ 114:ポ ㊧ 133.99:P3-3a
- ◎ 倫理学 ⑤① 川島秀一
  - ☆ 西洋倫理思想の形成Ⅰ～Ⅱ(川島他編 晃洋書房) ㊦ 150.23:セ ㊧ 150.23:S5
- ◎ 歴史B(東洋) ① 愛宕元
  - ☆ 中国史上・下(宮崎市定著 岩波全書) ㊦ 222.01:ミ ㊧ 222.01:M2
- ◎ 考古学 ① 前園実知男 松藤和人
  - ☆ 古代技術の復権(森浩一対談集 小学館) ㊦ 210.2:コ ㊧ 202.51:K33
  - ☆ 新・古代史発掘 1983～87年(朝日新聞社) ㊦ 210.2:シ ㊧ 202.51:S19
- ◎ 社会学 ④⑤ 森谷 健 田村雅夫
  - ☆ 現代の社会学(居安正他編 ミネルヴァ書房) ㊦ 361:ゲ ㊧ 361:G17
- ◎ 現代社会と労働 ① 藤村博之、石田光男
  - ☆ 人材形成の国際比較(小池・猪木編 東洋経済) ㊦ 366.7:ジ ㊧ 336.47:J3
- ◎ 法学 ⑤① 井ヶ田良治
  - ☆ 法とは何か(渡辺洋三著 岩波新書) ㊦ IS Y100 ㊧ 321:H21
  - ☆ 法を学ぶ(渡辺洋三著 岩波新書) ㊦ IS Y338
- ◎ 政治学 ⑤① 中谷 猛
  - ☆ 政治思想と平和(中谷編 昭和堂) ㊦ 319.8:セ ㊧ 319.8:S38
  - ☆ 現代政治学 改訂版(池田・中谷著 法律文化社) ㊦ 311:ゲ ㊧ 311.1:G6-1a

- ◎ 経済学 ② 清川義友
  - ☆ 経済学入門(篠原三代平著 日経文庫) ㊦ 331:シ
  - ☆ 経済学第一歩(小泉進著 岩波書店) ㊦ 331:コ ㊧ 331:K59
- ◎ 数学 ⑤① 松井邦光
  - ☆ 数学通論(矢野健太郎著 裳華房) ㊦ 410:ヤ ㊧ 410:Y2
- ◎ 地球と宇宙の科学 ④ 宮島一彦
  - ☆ 星をさぐる(佐伯恒夫著 大阪書籍) ㊦ 443:サ
- ◎ 生命の科学 ⑨⑩ 久米直明
  - ☆ 色の科学(中原勝巖著 培風館) ㊦ 425.7:ナ
  - ☆ 生命とは何か(丸山圭蔵著 共立出版) ㊦ 461:マ
- ◎ 科学史・科学論 ③④ 島尾永康
  - ☆ 科学の現代史(島尾永康編 創元社) ㊦ 402:シ ㊧ 402:S7-2

### 図書館利用の皆さんへ！(お願い)

図書館では利用者の皆さんが静かで勉学のし易い環境保持に日頃努力していますが、利用者の皆さん方にも以下の4点についてご協力をお願いします。

- 第1点 館内で大声の私語、談笑は慎んで他の利用者に迷惑を掛けないように心掛けて下さい。
- 第2点 椅子を並べて寝転んだり、荷物を机、椅子に置かずに、一人でも多くの人が利用できるように心掛けて下さい。
- 第3点 喫煙は1階ラウンジおよび3階の喫煙室に限ります。
- 第4点 図書館内での飲食は厳禁です。皆さんの共有財産である施設の床や図書を汚さないようにお互いに気持ち良く利用しましょう。

最後に 利用した図書は次の利用者のために必ず元の書架に戻して下さい。



## 新聞・新聞学に関する二次文献(下)

### <特殊な新聞>

32. 新聞錦絵の世界 高橋克彦著 PHP研究所 1986  
(Ⓔ721.8; T6)

新聞錦絵は新聞の一種ではなく、むしろ新聞記事を錦絵化したものと定義され、著者の個人コレクション130種を原文抜粋と解説を加えて収録、テーマ別に編集され、カラー複製63枚を含む。

33. かわら版物語 小野秀雄著 雄山閣 1988  
(Ⓔ070.21; O-3A)

瓦版に関する総合的解説書で18の口絵と133の挿図によって、災害、敵討等7主題にわたって詳述、末尾に瓦版年表が付き、元和元年(1615)年から慶応4年(1868)までカバーしている。

34. 号外 田村紀雄解説 池田書店 1974  
(Ⓔ070.21; G)

最初の号外(慶応4年:1868)から三菱重工爆破(1974)まで約160種の号外コレクション。簡単な解説が付く。

### <新聞関係の団体、協会、人名>

35. 新聞人名辞典 永代静雄他編 全3巻 日本図書センター 1988 (Ⓔ281.03; S15)

1巻は『昭和新聞名家録』新聞研究所、昭和5年の復刻。2巻は『新聞及新聞記者』、『日本新聞年鑑』等大正10年から昭和5年までを発行順に集成したもの。3巻は『新聞人名辞典』新聞の新聞社、昭和4年の復刻。

36. 明治新聞雑誌関係者略伝 <明治大正言語資料20>  
宮武外骨他著 みすず書房 1985 (Ⓔ070.21; M5)

所収  
東京大学法学部明治新聞雑誌文庫主任であった宮武外骨がまとめたものを西田長寿が補訂し、昭和42~52年に『日本古書通信』誌に発表したものの増補稿。各人の伝記項目中、生没の判明している人は、年月日、没年齢を記し、参考文献を付記したものもある。

37. 日本新聞年鑑 1947~ 日本新聞協会  
(Ⓔ070.21; N2)

概況編は年間の国内外の新聞界の動き、現況編は各地方別に日本新聞協会加盟社(放送局も含む)の、創刊・社史・綱領・発行部数・発行形態・通信機構を収載。資料編は新聞関係の賞、新聞普及、広告動向、用紙統計、海外特派員一覧等からなり、末尾に新聞人名録がつく。

### <新聞の用語> (時事用語を除く)

38. マスコミ用語辞典 内川芳美他編 東洋経済新報社 1982 (Ⓔ361.54; M51)

マスコミ関係の用語を50音順に配列し、各語の説明の他に関係法規、自主規制も付加している。

39. 英字新聞を読む辞典 木塚晴夫編 ジャパンタイムズ 1982 (Ⓔ833.7; E)

40. 英字新聞を読むための表現辞典 阿部義明他著 語学春秋社 1988 (Ⓔ836.8; E6)

上記38は英字紙を読む能率を高める約70,000語収録。39は英字紙の語法、決まり文句、基本用語を見開きの対訳で載せ、末尾に語索引が付く。

### <新聞小説>

41. 現代新聞小説事典 『解釈と鑑賞』42(15) [1977]  
(P910.1; K3) 所収

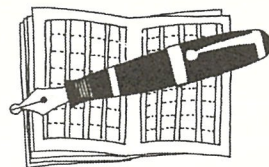
新聞小説に関する記事23編の後に「現代新聞小説一覧表」と「現代新聞小説作品事典」がつく構成、前者は主要8紙に赤旗、北海道、中部日本、西日本の各紙を加えて昭和20年から50年にわたるリスト。後者は約170点の新聞について、初出、梗概、評価(作品・作家研究)を記載。戦後の新聞小説の事典として最適。

42. 新聞小説史年表 高木健夫 国書刊行会 1987  
(Ⓔ910.26; S27)

文久2年(1862)から昭和30年までの新聞小説を92紙から年代順に作品、人物、事件、風俗等を記載。

43. 新聞小説史 高木健夫 国書刊行会 1974-1981  
(Ⓔ913.6; T6)

1巻は明治篇、2巻大正篇、3巻昭和篇Ⅰ、4巻昭和篇Ⅱの構成。各巻の末尾に事項、小説、人名を一つにした索引がつくので、通史の他に該当事項だけの情報もえられる。末尾に参考文献がつく。



## 実例を中心とした 資料のさがしかた—37—

### 【質問例 1】

- \*ペレストロイカについての図書はありますか。
- \*NIESについての図書はありますか。

### 【回答】

これら2件の質問は同じさがし方で資料が見つかります。2件ともコンピュータ検索のワード検索（書名中に使われた単語を探す検索）をして下さい。

<ペレストロイカ>

F W: PERESUTOROIKAと入力して下さい。

今出川、田辺とも同じです。

今出川で11件、田辺で10件の資料が見つかります。

「ペレストロイカを読む」(302.38; P3) 「ペレストロイカは進む」(312.38; I3) 「ソ連経済のペレストロイカ」(332.838; A5) 「ペレストロイカの思想」(312.38; P2) 「私の見たペレストロイカ」(岩波新書)など。

次にこれらの資料が分類されている箇所(302.38 ソビエト社会文化諸事情一般、312.38 ソビエト政治事情、332.838 ソビエト経済事情)をコンピュータで分類検索をするか、開架室の該当する分類箇所に行って探して下さい。書名にはペレストロイカという語が含まれていないが、ペレストロイカについての関連図書が見つかります。ペレストロイカの関連語として“ゴルバチョフ”でも探してみして下さい。この場合人名ではなくワードとして探しますので人名の原綴りは不要です。

<NIES>

NIESは以前NICSと呼ばれていましたので両方で探して下さい。F W: NIES OR W: NICSと入力して下さい。アルファベットの頭文字で構成される語はそのままの形で入力して下さい。COBOL, ECなども同様です。「アジアNIES総覧」(302.2; A12) 「アジアNIES最前線」(332.82; S3) 「もっと知りたいNIES」(302.2; N4)などの資料があります。

ラーネッド記念図書館所蔵分を検索する場合は、アルファベットの頭文字で構成された語の読みで入力して下さい。NIESはNI-ZU, NICSはNIKKUSUと入力します。これは書名をカナ読みで入力してあるためです。今出川では所蔵していなかった「土着と近代のニックス・アセアン」(332.2; ジ) 「奇跡と幻影 世界的危機とNICS」(332.06; リ)などの資料があります。ペレストロイカ、NIESについて図書資料だけでなく雑誌の記事も探したい場合は、各種の雑誌記事索引類、雑誌総目次・総索引

を利用して探して下さい。

### 【質問例 2】

マイケル・ポラニーの著作は所蔵していますか。

### 【回答】

外国人の著作を著作名から検索するには、その著作者の名前の原綴りで検索する必要があります。ただし、ラーネッド記念図書館所蔵分については著者名のカナ表記からでも探すことが出来ますので著者名原綴りが不明の場合はまずラーネッド記念図書館の所蔵を探してみして下さい。コンピュータ検索で、F A: PORANI-, MA IKERUと入力して下さい。何点かの著作が見つかりましたので、D ALLと入力してデータを見て下さい。データの著者名ヨミの項目にカナ表記と原綴り

(POLANYI, MICHAEL)の両方があります。

これでラーネッド記念図書館での所蔵と著者名原綴りがわかりましたので、次に今出川図書館の所蔵をコンピュータ検索とカード目録の両方で探して下さい。今出川図書館では「知と存在」(133.99; P3-2) 「人間の研究」(133.99; P3-3A) 「自由の論理」(316.1; P-1B) 「科学・信念・社会」(404; P2-1A) 「暗黙知の次元」(115; P-1A)の5点を所蔵しています。なお、ラーネッド記念図書館では今出川図書館所蔵分の他に「個人的知識」(401; ポ)を所蔵しています。

著者名原綴りが不明の場合、この方法で探すと簡単にわかりますが、ラーネッド記念図書館で所蔵している場合のみ有効なので、もし所蔵が無い場合は人名事典などで調べる必要があります。人名事典には「岩波西洋人名辞典」など多数ありますが、どの人名事典に求める人が掲載されているかわかる資料が「西洋人名典掘録」

(028.283; S)です。この資料で調べると、どの人名事典に、どれくらいの量の記事が掲載されているかが判ります。

この資料は過去に出版された人名事典が対象のため最近の人物の場合はみつからない場合が多くあります。マイケル・ポラニーもみつかりませんでした。著者名原綴りがわかれば良いのですから「翻訳図書目録77/84」(027.34; N)で探してみして下さい。この資料は日本で翻訳出版された図書を収録した図書目録です。巻末に原著者名カナ表記索引がついています。この索引で見るとポラニー、マイケル→POLANYI, MICHAELがわかります。



〔質問例 3〕

サイデンステッカーが日本及び日本人について書いた図書はありますか

〔回答〕

質問例2にならって図書館に所蔵するサイデンステッカーの著者を機械検索してみると「西洋の源氏日本の源氏」(913.36; S10) (田辺913.36; サ) 「私のニッポン日記」(田辺KS; 653) を所蔵していることがわかります。次に著者名カード目録により「現代日本作家論」(910.28; S2) 「湯島の宿にて」(910.4; S6) の2冊を所蔵しているのがわかります。

ここで更に当館での有無とは別にサイデンステッカーが日本及び日本人について書いたものにはどんなものがあるかを調べます。外国人の著した日本関係邦文図書を収録してある「世界のみた日本」(参考室027.34; K) を利用して調べます。著者索引でSeidensticker, Edward G. を引くと11冊あります。

この中で「外人さんのみたシズオカ」は索引からたどった該当頁にサイデンステッカーの著作データはありませんが、多数著者の著作として「外人さんの-----」が掲載されていますので、この著作と思われます。これ等について書名検索をしてみると

「日本とアメリカ」(319.21; P) も所蔵しているのがわかりました。

＜資料紹介＞

「世界のみた日本」

「国立国会図書館所蔵日本関係欧文図書目録」(025.1; K2-3) の姉妹編ともいうべきもので日本関係邦文図書を対象とし戦後刊行され1989年6月末までに同館が収集・整理した約2,600点が収録されています。

著者の範囲は在日外国人、日系外国人、日本国籍を有する者でも幼年期に海外に渡った者等外国人の眼で日本を論じている著者は対象となっています。

収録した文献の範囲は、日本及び日本人について書かれている図書を載録対象としていますが日本語の教科書、辞書等は原則として除外してあります。

索引は巻末に書名索引・著者名索引・原書名索引が付されています。

一般に外国人が日本人・日本文化について書いたものを調べるのに図書館が所蔵しているものの中から、参考になるものを次に挙げておきます。

日本人論の系譜→「正論」(P051; S77) 131号

類書紹介：日本人論→「出版ニュース」(P020.1; S17) 1010号

「日本人論に関する12章」(361.6; N18)

雑誌「日本人」「日本及日本人」目次総覧1-2

(P051; N46-2)

外国人の日本体験 文献案内「伝統と現代」

(P300.1; D2) 9号

「邦訳日本研究文献解題」(028.21; S3)

外国人の書いた日本1-12「日本古書通信」(P023; N) 50巻1-12

日本関係論文の一覧表：外国人のみた批判表→「自由」(P051; J18) 19巻3号

アメリカ人の日本論参考文献→「アメリカ古典文庫」(083; A) 22巻

「日本文化の表情」(210.04; U2-3)

「民族と文化の発見」(041; M4)

「日本人論の中の日本人」(361.6; T-3)

「外国人による日本人論の名著」(中公新書; 832)

「知日家関係文献目録」(028.21; H)

〔質問例 4〕

生物指標についての図書はありますか。

〔回答〕

“生物指標”とは、生物や、その反応によって環境をはかる方法をいい、大気、土壌、水域などの環境汚染の指標として使われています。分類としては生物学(460)生態学(468)、公害一般・環境問題(519.5)などが考えられますが、まず“生物指標”という語からオンライン検索をして下さい。検索はワード検索で“生物”、“指標”を入力して下さい。(F W: SEIBUTSU AND W: SHIHYOUと入力)今出川図書館で3件、ラーネッド記念図書館で2件みつかります。

「環境と生物指標」(468; N4)

全2巻。1：陸土には大気汚染、煙塵、土壌金属汚染、農薬などの項目、2：水界には河川、湖沼、海洋などの項目があり環境汚染と生物の関係が記述されています。

「指標生物—自然を見るものさし—」

(468; S19, 田辺468; シ)

第3章が“環境の変化を調べるための指標生物”という章で、大気の汚染を知る、水の汚染を知るなどの項目があります。

「指標生物学 生物モニタリングの考え方」

(468; M8-2, 田辺468.2; モ)

特に環境汚染に関する項目は無い。

同じくワード検索で“環境汚染”からも検索してみてください。(F W: KANKYOU AND W: OSENと入力)何点かの資料が見つかりますが生物指標との関連では「環境汚染と指標植物」(471.7; T2)という図書が利用出来ます。

同志社で所蔵しているもの以外の図書をさがすには「日本件名図書目録」(025.1; N9, 田辺025; ニ)を利用して件名：生物指標からさがして下さい。

# 学内すべての端末機で図書の検索が出来ます

★ 図書館では図書検索のオンライン化を進め1989年度から図書館、研究室事務室など一部の端末機で利用出来るようになっていたが、1990年5月1日から学内に設置されているすべての端末機（オンライン）で全学の図書資料（逐次刊行物を含む）の情報検索が可能となった。これで本来のオンラインシステムの機能を果たせることになったと言える。

この「オンライン目録検索システム」では1982年以後に入力された全学の図書所蔵情報約34万タイトル、逐次刊行物所蔵情報約2万タイトル（いずれも1990年12月現在）が検索出来る。また、現在1981年以前の図書資料の遡及入力も実施に向けて検討されている。

★ 学生諸君は図書館の他、両校地TSS教室、昨春誕生した情報処理実習教室（K21、TC1-132）で利用出来る。また、昨年8月にデジタルPBX電話交換機が取替え設置されたことに伴い、学内に情報コンセント（全学75箇所、内今出川図書館15箇所、ラーネッド記念図書館10箇所）が設置されたので、このコンセントを利用して持参のパソコンで利用することも可能となった。

★ なお、現在の検索方法を更に簡素化する方法について検討しており、実施の際には広報類等でお知らせする。

## 利用方法

オンライン検索の方法については下記の手順で出来ませんが、分かり難い場合は図書館カウンターを訪ねてください。また、検索マニュアルは各研究室事務室、文献室、図書館カウンターに置いてありますが、オンラインによる検索マニュアルも用意しています。

## 起動および終了方法

1. 端末機をオンラインにしてください。
  2. BOOKと入力するとメニュー画面となりますので、検索を行いたいキーを選択して下さい。
  3. 検索は検索マニュアルを参考にして行って下さい。
  4. 3時間以上連続して利用すると自動的にセンターとの接続が切れます。
  5. 終了はQUITと入力すると、元の画面に戻るので、PF7またはPF11のキーを押して下さい。（逐次刊行物検索の終了はメニュー画面にしたがって下さい）
  6. 現在情報コンセントからの逐次刊行物の検索は出来ません。
- \* 図書館の目録コーナーの端末機は常に起動した状態になっています。

## あとがき — 「びぶりおてか」 終刊にあたって —

本誌は、1967年7月に創刊号（No.1）を発刊以来、図書館の活動や報告、文献紹介、サービス案内など様々な情報を提供してまいりましたが、本年4月の学術情報センター発足（別掲記事で紹介）に伴い、本号をもって終刊といたします。ご協力、ご助言賜りましたことを感謝いたします。

学術情報センター発足後は、種々のメディアの活用による広報活動を計画しています。センターの使命である学習・教育・研究を支える役割の一環を担えるように推進いたしますので、一層のご支援をよろしく願いたします。

“びぶりおてか”

同志社大学図書館報 No.48 1991年1月7日発行

発行 同志社大学図書館 京都市上京区今出川通烏丸東入 電話 (075) 251-3960

編集責任者 樋口 完 (図書館庶務課長) 印刷 眞興社